

山陰における中世前期の墓標と墓

中森 祥（鳥取県教育文化財団調査室）

1. 木製塔婆の事例（図1）

山陰両県（鳥取・島根）における出土事例は21件あるが、その分布は出雲（松江市～出雲市）を主体とし、鳥取の事例も島根県境に近い米子市南西部であるため、非常に偏っている。

各木製塔婆の形態を比較すると、大きくは塔婆頭部が五輪塔形のもの（1～4）と山形があり、後者については2段の切り込みをもつもの（5）、および山形の下に横方向の刻線をもつものに分けられる。五輪塔形のものでは4がもっとも小型で、共伴する遺物から平安時代後期のものとされ、もっとも古く位置づけられるが、紀年銘をもつものの最古が大宰府史跡出土例の嘉禄3（1227）年とされており、それよりも相当遡るため検討を要しよう。一方の山形では、6～8、11のように3～4mとなる非常に大型のものがつくられている。山持遺跡例に比べると吉谷亀尾山遺跡（11）例はやや幅が広く、また頭部の山形が低い。この頭部形態は、山持遺跡と西川津遺跡では尖り気味を呈す点で類似している。後者が近世後期の銘が書かれているのに対し、前者は同一層から出土する遺物で最新のものが平安時代とされ、年代測定から13～14世紀に比定されている。このタイプがどのような展開をしていたのか、また吉谷亀尾山例との関係について今後検討が必要であろう。

こうした卒塔婆の立てられた場所について、江戸時代後期のものながらまとまって出土した西川津遺跡をみると、40本ほどの杭状の木が立てられ、そこに塔婆も含まれていた。その位置と明治時代の切り図を照合させた結果、これら杭列が川岸に立てられた状態であったことが判明している。今回紹介した遺物についても、多くが河川や溝などに関連して出土しており、塔婆流しや流水灌頂といった葬送儀礼に伴うものであろう。

2. 五輪塔の導入（図2）

13～14世紀の紀年銘をもつものは13例あるが、その大半が14世紀中頃以降のものであり、その分布は因幡・伯耆から出雲東部、そして石見西部となっており、両者の中間である石見東部から出雲西部には事例がない。この中で最古の銘をもつ倉吉市大日寺文永2年塔のように、古いタイプの五輪塔（2）が伯耆東部ではまとめてみられ、とくに一石五輪塔（4・5）はこの地域以外にあまりみられない。さらに、この地域には赤崎塔（1）と呼ばれる独特な石塔が分布し、特異な地域といえよう。

3. 火葬墓の導入期（図2）

火葬導入の早い段階の事例として、鳥取県では倉吉市打塚遺跡（6）がある。一辺約12mの方墳で12世紀後半に位置づけられる。また、同じく県中部・長瀬高浜遺跡においても、12世紀前葉～中葉にかけての土師器皿を伴う火葬墓が複数基あることから、この段階で火葬が導入されたことは確実である。一方島根県東部では、古代末の事例があるものの本格的な導入は14世紀になってからであり、検出事例としては15世紀以降増加している。その初源的な例は安来市油坪3号墓西側墳裾に位置する石組墓（7）で、この下層に火葬墓を含む土坑が5基、ほぼ一列に並んでいた。また基壇上面から破損した陶製宝篋印塔が2基出土した。

墳墓や石積基壇には火葬骨が散骨されたような事例が多く、さらに五輪塔・宝篋印塔を立てた可能性のあるものがみられ、このような石積基壇（墳墓）・火葬骨・石造物というセットが平安時代終わりから鎌倉時代において成立したことが窺える。

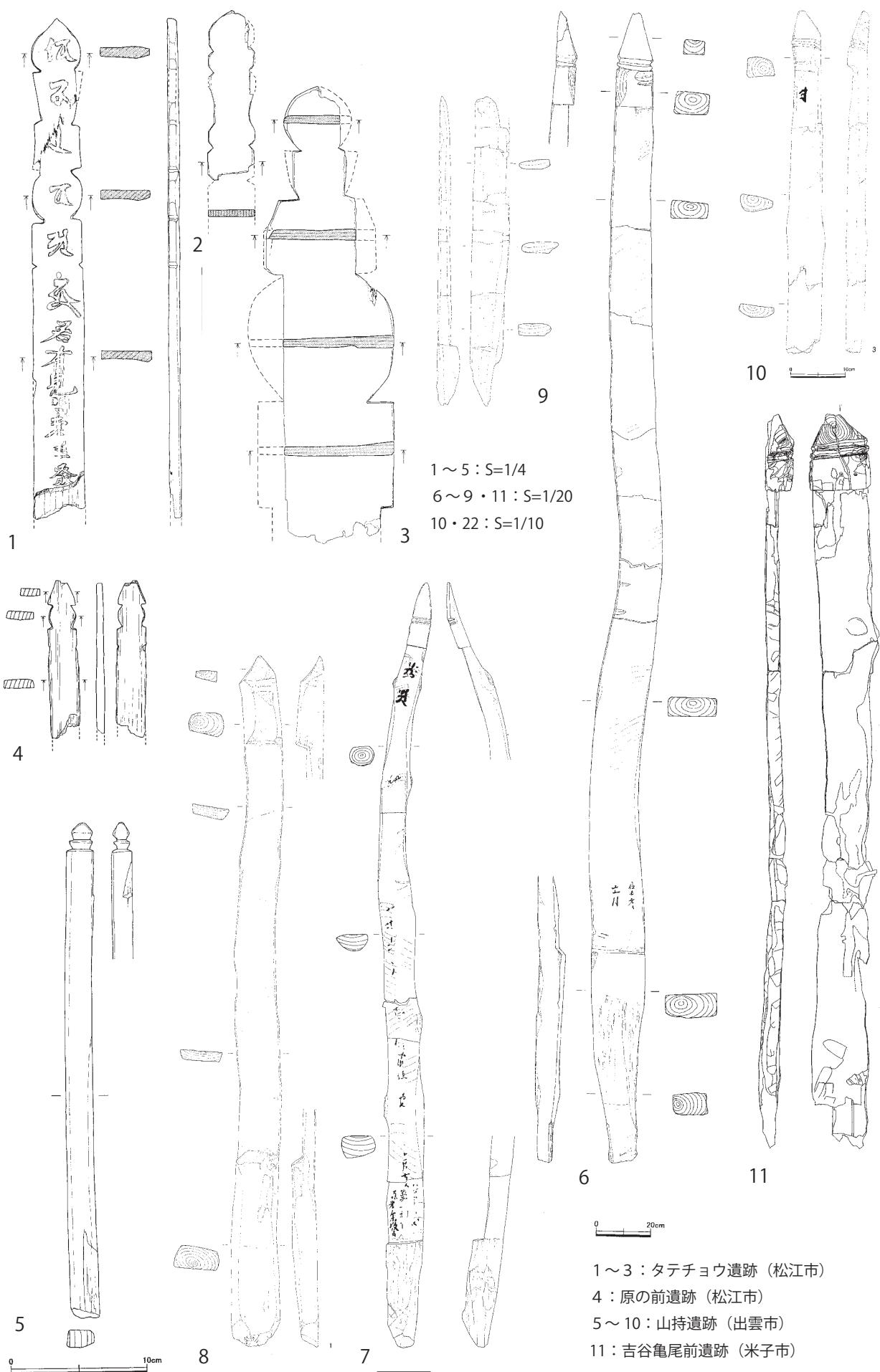
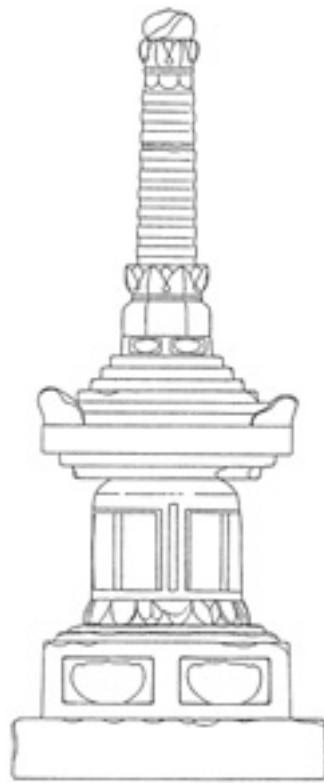
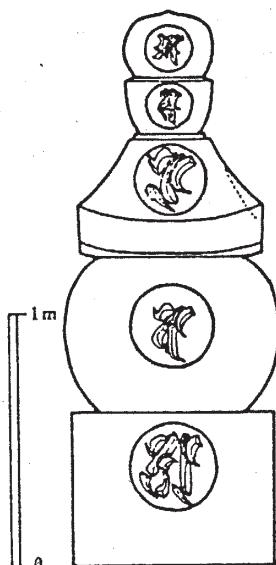


図1 出土木製塔婆



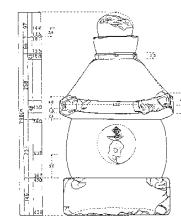
1 赤碕塔 (鳥取県琴浦町)



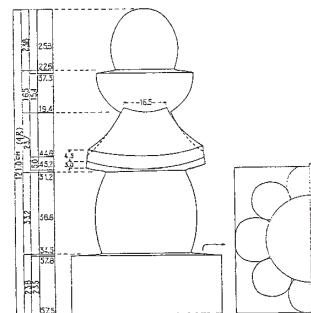
2 大日寺五輪塔
(頼朝墓・倉吉市)



3 助沢五輪塔
(鳥取県江府町)



4 大日寺円地坊
19号塔 (倉吉市)



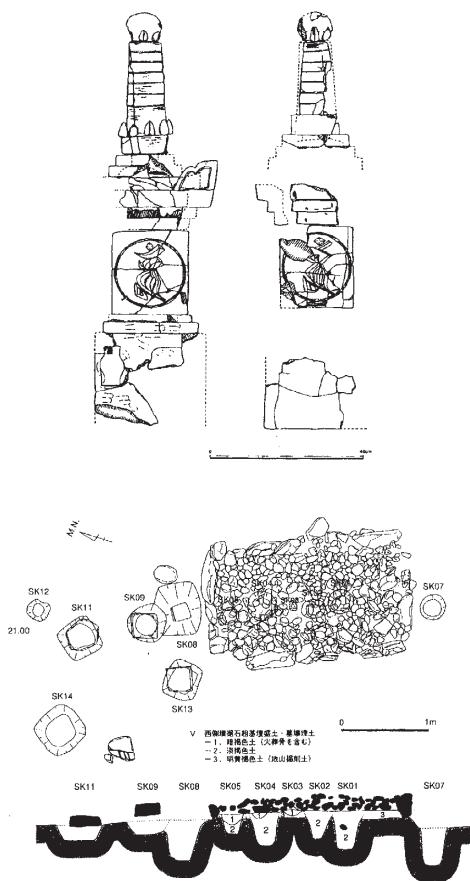
5 広瀬ヒイデ山
五輪塔 (倉吉市)

1~5 : S = 1 / 30



6 打塚遺跡 (倉吉市)

S=1/160



7 油坪3号古墓 (安来市)

図2 石造物および墳墓・石積基壇